

《論説》

女性歴史家と戦争——アンナ・コムネナの思い——

井上 浩一

1. アンナ・コムネナの戦争と平和

古代ギリシアにおいて歴史書の主題は戦争であった。その伝統はビザンツ帝国に受け継がれた。ビザンツ歴史学の祖と言ってよいプロコピオスの著作は、トゥキュディデスに倣って『戦史』と呼ばれている。ユスティニアヌス 1 世時代の戦争を記したプロコピオスから 600 年のち、西洋古代・中世における唯一の女性歴史家アンナ・コムネナが現れ、父アレクシオス 1 世コムネノス（在位 1081～1118 年）の治績を記した『アレクシアス（アレクシオス 1 世伝）』もまた戦争の歴史である。戦場に立ったことのない女性にこのような歴史が書けるはずはないという理由で、著者はアンナではないとする説が出されたほどである¹。

父アレクシオス 1 世の戦いを謳い上げている『アレクシアス』には、次のような、やや意外な言葉も含まれている。

- ①アレクシオス皇帝はあらゆる手段を通じて平和を維持しようと努めた。……彼は生まれつきの平和の人であった。（『アレクシアス』12 巻 5 章 2 節²）
- ②アレクシオス皇帝は、（トルコ人との）和平協定が自分の死後もずっと守られてゆくよう願っていた。……ところがその努力も、帝位を継いだ者たちの愚かさによって空しいものとなってしまった。（14 巻 3 章 9 節）
- ③（強力な敵に対しては）戦わずに勝つよう努めるべきである。將軍の第一の徳は、危険を冒すことなく勝利を得ることである。……勝利はひとつであるが、勝利を獲得する方法はさまざまである。（15 巻 3 章 2 節）

アンナは父の行なった戦争について詳しく記しつつ、ふと思いついたように個人的な見解を付け加えた。戦争の連続であったアレクシオスの生涯と矛盾するような文言を挿入した理由として、夫ニケフォロス・ブリュエンニオスへの不満や、弟ヨハネス 2 世に対する憎しみが指摘されることもある³。

¹ J. Howard-Johnston, “Anna Komnene and the Alexiad,” *Alexios I Komnenos, vol. 1 Papers*, ed. M. Mullett and D. Smythe, Belfast, 1996, pp.260-302.

² 以下『アレクシアス』からの引用は、*Annae Comnenae Alexias*, 2 vols., ed. D. R. Reinsch and A. Kambylis, Corpus Fontium Historiae Byzantinae 40, Berlin, 2001.に基づき、巻・章・節番号を挙げる。

³ ブリュエンニオス『歴史』に対するアンナの不満については、L. Neville, *Heroes and Romans in Twelfth-Century Byzantium: The Material of History of Nikephoros Bryennios*, Cambridge, 2012, pp.182-193.参照。ヨハネス 2 世とアンナの帝位争いについては、近年 L. Neville, *Anna Komnene: The Life and Work of a Medieval Historian*, Oxford, 2016.が姉弟の対立を否定する見解を示したが、L. Vilimonović, *Structure and Features of Anna Komnene's Alexiad: Emergence of a Personal History*, Amsterdam, 2019.が通説の立場から反論している。

夫のブリュエンニオスは歴史家で、即位以前のアレクシオスの業績を記した『歴史』を著した。本来ならアレクシオス 1 世の治世末まで記すはずだったところ、著者の死によって中断されたものである。妻のアンナがそのあとを受けて書いたのが『アレクシアス』ということになる。ブリュエンニオスは、青年将軍アレクシオスの功績として、自分の祖父ブリュエンニオスの反乱を鎮圧したことを挙げている⁴。一時は都コンスタンティノープルに迫る勢いだった反乱軍を、アレクシオスが巧みな策略で撃破したという話である。

歴史家ブリュエンニオスは、正々堂々と戦う祖父が敗北し、狡猾な戦術をとったアレクシオスが勝利したと、ふたりを対照的に描いている。妻の父であり、現皇帝ヨハネスの父でもあるアレクシオスをあからさまには非難しないものの、祖父のことを詳しく語るなら「もうひとつのイリアス」が必要だと述べており、英雄のように戦った祖父に思い入れがあることは明らかである。アンナには、父は卑怯だ、英雄ではないと言われているように思えたであろう。わずかな手勢を率いて奮戦した父、巧みな策略で強敵を破った父をアンナは弁護したかった。③の文章は夫ブリュエンニオスへの反論だというわけである。

②の文章は「帝位を継いだ者たちの愚かさ」という文言からもわかるように、アレクシオス 1 世の息子ヨハネス 2 世への悪口である。アンナは父の跡目をめぐって弟と争い、敗れて修道院に身を寄せた。弟ヨハネスへの恨みは深く、晩年に父の歴史を記すにあたっても、弟のことはあえて無視している。ここでは「帝位を継いだ者」というもってまわった表現で言及したのであるが、もちろん非難の文章で、父は平和をもたらしたのに、粗野な軍人、戦うことしか考えない弟は、父の苦労を台無しにしてしまったという。

確かにヨハネス 2 世は典型的な軍人皇帝で、東西に遠征を繰り返し、都コンスタンティノープルに凱旋した⁵。凱旋皇帝を称える讃辞が、宮廷の御用弁論家によって謳い上げられた。武勇を称えられ、誇らしげに凱旋する弟を、都の修道院にいたアンナは苦々しい思いで見っていたに違いない。アレクシオスを「平和の人」と称える①も、戦争に明け暮れたヨハネス 2 世批判という文脈で読むことができるだろう。

2. ビザンツ人の伝統的な戦争観

しかしながら、夫ブリュエンニオスへの不満、弟ヨハネスへの憎悪だけが、アンナの戦争観を生み出したのではない。なるべく戦争を避け、交渉や金品で敵を懐柔する。卑怯と言われようと、不意打ちや待ち伏せといったゲリラ戦術を駆使する。夷狄同士を戦わせ、漁夫の利を得る。これらはビザンツ帝国の一貫した方針であった⁶。アンナはその伝統に忠

⁴ Nicephori Bryennii *Historiarum Libri Quattuor*, ed. P. Gautier, *Corpus Fontium Historiae Byzantinae* 9, Bruxelles, 1975, pp.257-283.

⁵ John II Komnenos, *Emperor of Byzantium: In the Shadow of Father and Son*, ed. A. Buccossi and A. Rodorigues Suarez, London and New York, 2016.

⁶ ビザンツ人の戦争観や戦術については、さしあたり井上浩一『ビザンツ 文明の継承と変容』京都大学学術出版会、2009 年、第 7 章「戦争——必要悪」参照。

実だったと言ってよい。むしろ、軍人皇帝ヨハネス 2 世やブリュエンニオス『歴史』こそが伝統からの逸脱であった。

ビザンツ人の戦争観を伝えるものとして、戦術書ないし軍事書と称される作品がある⁷。6 世紀と 10 世紀、ビザンツ帝国が珍しく拡張主義的政策をとった時代に多く書かれた。にもかかわらず、たとえばユスティニアヌス 1 世時代の逸名の戦術書は、なぜこのような書物を著すのかを説明するのに先立って、「戦争が大きな悪、あらゆる悪を凌ぐ悪であることを私は知っている」と述べている。マウリキウス皇帝の名で伝わる、同じく 6 世紀の戦術書も、「賢明な将軍は、本当に有利な条件がない限り、敵との正面戦争はしない」という格言を紹介している。

10 世紀初に編纂されたレオン 6 世の『戦術書』は、皇帝の著作ということもあって、戦争論の権威とみなされていた。その序文には「神の似姿である人間は皆、平和を守り、互いの愛を育まなければならない」と記されている。戦術書とは思えないような文言である。著作の冒頭でレオンは「キリストにおける平和の皇帝」と名乗っている。征服した民族の名を並べる征服称号に飾られたローマ皇帝と対照的で、アンナの戦争観——アレクシオスは「平和の人」——につながるものである。

レオン 6 世はまた、野蛮人とはいえ平和的に暮らしている民族を攻撃するのは正しくない、とも述べている。正しい戦争とは防衛戦争だと言うのである⁸。10 世紀には他にも多くの戦術書が書かれたが、『ゲリラ戦』や『籠城戦』という表題からも、アンナの言うような「危険を冒すことなく」勝つ戦術が良しとされていたことがわかる。

レオン 6 世に代表される伝統に対して、11 世紀には新たな動きが見られるようになった。現代の研究者が軍事貴族と呼んでいる社会層の抬頭とともに、戦争に対する考え方に変化が生じたのである。軍事貴族とは、帝国の高級軍事官職に就き、地方の拠点に私兵を擁する名門家系のことで、その代表とされるのがコムネノス家やブリュエンニオス家である。彼らは 11 世紀の後半に帝位をめざして反乱を繰り返した。ブリュエンニオス家は失敗したが、コムネノス家は帝位篡奪に成功し、宿敵だったブリュエンニオス家も取りこんで——アンナ夫婦は政略結婚であった——、アレクシオス 1 世以降 100 年にわたって続く王朝を樹立した。

コムネノス王朝第 2 代のヨハネス 2 世は、自分が正統な後継者であることを示すべく、即位後まもなく、父の遺言という触れ込みで『アレクシオスの歌』⁹を公表した。『アレクシオスの歌』は父子二代の戦う皇帝を讃美している。3 代目マヌエル 1 世はビザンツ皇帝としては珍しく征服称号を帯びた。アンナが修道院で『アレクシアス』を書いたのは、軍人皇帝たちが武勇と戦果を誇示していた時代であった。宮廷から発せられる戦争讃歌に対して、

⁷ 戦術書については、井上前掲書第 7 章に加えて、井上浩一「ビザンツ帝国の戦争——戦術書と捕虜交換」『関学西洋史論集』34 号、2011 年、23～37 頁参照。

⁸ A. Laiou, “On Just War in Byzantium,” *To Hellenikon. Studies in Honor of Speros Vryonis Jr.*, vol. I, ed. S. Reinert et al., New Rochelle, 1993, pp.153-177.

⁹ P. Maas, “Die Musen des Kaisers Alexios I,” *Byzantinische Zeitschrift*, 22, 1918, pp.348-369.

皇帝の本来の姿は違ふとアンナは抗議しているようである。父アレクシオス 1 世はそんな野蛮な皇帝ではなかった……。それぞれ自分こそが父の良き理解者であると、父を奪い合う姉弟の姿が浮かび上がってくる。

アンナの主張は『アレクシアス』の具体的な叙述、戦争記事にも反映している。その例として、小アジア西北部のニカイアをめぐるトルコ人との戦いをみておこう。

3. アレクシオス 1 世のニカイア奪回作戦

第 1 回公会議の開催地として有名なニカイアは、11 世紀後半、軍事貴族の相次ぐ反乱のなかでトルコ人の支配下に移った。この町を抑えたのは、セルジューク朝の一族スライマンで、ここを拠点としてバグダッドのスルタンから自立した政権を樹立した。一般にルーム・セルジューク朝と呼ばれている。アレクシオス 1 世は即位直後からニカイア奪回をめざして多彩な戦略を展開する。

1086 年、ルーム・セルジューク朝の初代君主スライマンが死ぬと、代官であったアブル・カシム（アペルカセム）がニカイアを掌握し、隣接するビザンツ領への攻撃を始めた¹⁰。これに対抗するためアレクシオスは陸海軍を出動させ、一定の戦果を収めた。軍事的成功を背景にアレクシオスはアブル・カシムに書簡を送り、和平協定の締結を呼びかける。ちょうどスルタンの軍隊が各地の独立政権を次々と屈服させていたこともあって、アブル・カシムは呼びかけに応じることにした。

協定が成立すると、アレクシオスはアブル・カシムを都へ招待した。壮麗な都コンスタンティノープル、「ローマ帝国」の威光を見せつけようとしたのである。宮殿・教会・広場に案内されたアブル・カシムは、自分が戦おうとした相手が如何なる存在なのか思い知らされたに違いない。ビザンツ側がとくに力を入れたのが競馬観戦で、毎日のように競馬場に招待したという。充分もてなしたうえで、多くの贈物とセバストスという皇族級の高位称号を与えて、アブル・カシムをニカイアに帰らせた。アレクシオスは抜け目なく、アブル・カシムが競馬や浴場、狩りなどを楽しんでいるあいだに、ニカイア奪回の拠点となる要塞を建設していた。父の策略をアンナは、スパルタを欺いたテミストクレスの逸話に譬えている。もっとも、トゥキュディデスの原文を確認しなかったようで、テミストクレスとすべきところアルキビアデスと間違えてしまった。

アブル・カシムがニカイアに戻って数年後、スルタンの軍勢が到来した。包囲は 3 ヶ月続き、アブル・カシムは皇帝に支援を要請した。アレクシオスはただちに援軍を派遣した。父の行為についてアンナは次のように述べている。

¹⁰ 『アレクシアス』6 巻 9 章～12 章に記されているアブル・カシムとの戦争と交渉については、K. Belke, “Byzanz und die Anfänge des rumseldschukischen Staates,” *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik*, 61, 2011, S. 65-79. 参照。

これはアブル・カシムを救うためではなく、最終的に彼を破滅させるためである。……ローマ帝国の敵同士が戦っている時には、弱い方を支援するのが得策である。(6 巻 11 章 2 節)

しかし救援軍はニカイアまで行かず、都へ撤退した。セルジューク朝のスルタンが増援部隊を送ったとの報せが入ったからである。勝てる見込みのない戦いはしない、危ない橋は渡らない、これまたビザンツ人らしい判断といえよう。しかもスルタンからアブル・カシムに対する同盟の提案があり、平和的にニカイアを回復する望みが無きにしても非ずであった。アレクシオスは洞ヶ峠を決め込むことにしたようである。切羽詰まったアブル・カシムは多額の贈物をもってスルタンのもとへ向かい、ニカイア統治を認めてもらおうとしたが殺されてしまう。

このあとニカイアの支配権は、スライマンの息子クルチ・アルスラン 1 世の手に移った。ルーム・セルジューク朝第 2 代の君主である。ようやく 1097 年になってアレクシオスはクルチ・アルスランからニカイアを奪回する。

4. 『アレクシアス』の戦争記事

ニカイアをめぐる攻防は、アレクシオス 1 世時代の戦争の実態、より正確に言えばアンナの戦争観を語っている。『アレクシアス』には対イスラーム戦争が多数記されているが、敵がイスラーム教徒であることをとくに意識した様子は窺えない。トルコ人のことを野蛮人と呼ぶものの、ノルマン人などキリスト教徒もしばしば野蛮人と呼ばれている。宗教戦争、聖戦という観念はなかったようである¹¹。

アブル・カシムとの戦いに限らず、『アレクシアス』にみられる対イスラーム戦争は、トルコ人の攻撃に対してビザンツ軍が反撃に出るというかたちで始まる。正しい戦争は防衛戦争という観念がここにも窺える。ただしビザンツ軍の反撃は手ぬるく、敵を殲滅するという意気込みはみられない。正面戦争はなるべく回避し、ゲリラ戦で敵を苦しめて、適当なところで講和に持ち込む作戦である。

ビザンツ軍の中心として戦っているのは外国人部隊である。アブル・カシムに講和を決意させたのは、「ケルト人」ないし「ラテン人」と呼ばれている西欧人の部隊、皇帝に仕えたノルマン騎兵の活躍であった。最終的にニカイア奪回を実現したのも、ちょうどビザンツ領を通過していた十字軍を脅しに使いつつ、巧みな策略と説得によってであった。さらにはイスラーム君主同士を戦わせることも繰り返し行なわれた。小アジアには地方独立政権がいくつもあったので、この戦略はかなり有効であった。対アブル・カシムの場合のように、独立政権を抑えたいセルジューク朝のスルタンと手を結ぶこともあった。

¹¹ ビザンツ人の聖戦観念については、I. Stouraitis, “Jihad and Crusade: Byzantine Position toward the Notice of ‘Holy War’,” *Byzantina Symmeikta*, 21, 2011, pp.11-63. なお井上前掲書、319～336 頁も参照。

異民族に武器をおかせる、帝国との友好を保たせるために、戦争以外の手段も用いられた。もっとも効果的だったのは金品や爵位を与えることである。帝都コンスタンティノープルの壮麗な景観も活用された。セルジューク朝スルタンの使節としてやって来たシアウスという人物は、ビザンツ文明に感動したのか、洗礼を受けることに同意した。アレクシオスはシアウスが持参したスルタンの書簡を活用して、いくつかの町を無血開城させている。アンナが描く戦いは、レオン 6 世などの戦術書に記されていた伝統的な戦略そのものである。

もちろんアレクシオス 1 世が真正面から決戦を挑んだこともある。即位直後の 1081 年 10 月に、南イタリアのノルマン軍を迎え撃ったデュラキオン（バルカン西部）の会戦はその一例である¹²。強力なノルマン騎兵部隊にビザンツ軍は惨敗を喫し、アレクシオスは命からがら戦場を離脱した。1087 年 8 月にもドナウ河畔のドロストロンで遊牧のペチェネグ人に決戦を挑んだ¹³。この時には、かつての敵、歴史家ブリュエンニオスの祖父が参謀格として同行していた。戦いを急ぐべきではない、要塞をしっかりと確保すべきだという老将軍の助言にもかかわらず、アレクシオスは若手将校の決戦論に与した。結果はやはり惨敗で、ビザンツ軍は総崩れとなった。死を覚悟して戦い続けるアレクシオスを、義兄ドゥーカスが「一兵卒ならそれもよかろうが、皇帝の命は個人のものではない」と諭した。

『アレクシアス』を読むと、アレクシオスが敗戦から学び、「危険を冒すことなく勝利を得る」ようになってゆく様子が窺える。理想の皇帝へと成長する姿を描こうとしたかのようである¹⁴。アレクシオス最後の戦争となったルーム・セルジューク朝の第 3 代マリク・シャーとの戦いは、全面的な対決とはならず、1116 年の和平条約によって終結した。都へ戻ったアレクシオスは凱旋式を断り、戦争孤児の救済に奔走した。戦争の歴史である『アレクシアス』の最後の記事は、孤児院の建設とボゴミール派異端への対処である。いずれも年代を無視してあえて最後においたもので、アンナの意図的な編集と思われる。戦う皇帝ではなく、慈悲深い、篤い信仰の皇帝を読者に印象づけたうえで、父の歴史は大団円へと向かう。

5. アンナの涙

アンナは父の手柄を誇らしげに書き記しつつ、戦争に関する独自の見解に加えて、嘆きの言葉も繰り返し挿入している。父の苦難を思うと涙が止まらないというのである。序文において「嘆きこそが本書の主題である」と宣言したアンナは、大団円となるアレクシオスの死亡記事の冒頭でも次のように回想している。

¹² 井上浩一「ノルマン戦争にみるビザンツ帝国の存続要件——中央政府と地方社会」井上浩一・根津由喜夫編『ビザンツ 交流と共生の千年帝国』昭和堂、2013 年、169～204 頁。

¹³ 『アレクシアス』7 巻 2 章～3 章。

¹⁴ P. Buckley, “War and Peace in the Alexiad,” *Byzantine Narrative: Papers in Honour of Roger Scott*, ed. J. Burke, Melbourne, 2006, pp.92-109.

アレクシオス皇帝の功績、多くの戦いを、歴史として将来の世代に伝えるよう文人に命じる皇后、私の母に対して、父が「やめてくれ」と言うのを聞いたことがある。父は自分のために悲しみ、不幸を嘆いてほしかったのである。(15 巻 11 章 1 節)

父の治績を記しつつ、苦難の生涯を思えば涙が溢れてくる。アンナは自分が歴史を書いていることをよく承知していた。歴史にとって大切なのは、著者の思いを吐露することではなく、真実を伝えることである。『アレクシアス』には、嘆きはこれまでにして歴史に戻ろうと自分に言い聞かせる場面が何度も出てくる。しかし父の最期を記すアンナは、涙の海から戻ることはなかった。

戦場から戦場をめぐり、宮殿にいることの少なかった父、内外の敵に立ち向かい、片時も休むことのなかった父は不幸だった。父の不幸は我が身の不幸でもあった。私には父との思い出がほとんどない……、『アレクシアス』を書き進めてアンナは改めて気づいたであろう。末尾に近い 14 巻 8 章では、トラキア地方のフィリップポリスについて「私はある用件で皇帝とこの町を訪れたことがある」と断って、町の様子を詳しく記している¹⁵。大切な思い出としてわざわざ書き加えたものと思われる。

アンナは自分の誕生にまつわる逸話を『アレクシアス』に盛り込んだ。これまた歴史書としては異例の記事である。

皇帝が宮殿に戻る 2 日前に母は産気づいた。母は十字架のお守りをお腹に当てて言った。「赤ちゃん、少し待って頂戴、お父様がお帰りになるまで。」……赤ちゃんは皇后の言いつけを聞き入れた。(6 巻 8 章 2 節)

母の言いつけどおり、父の帰還を待つて私は誕生した、とアンナは述べる。事件の順序を無視して、ノルマン戦争の終結、皇帝の凱旋に続けて自分の誕生を記したのは¹⁶、私という存在は帝国の誉れであると仄めかすのみならず、戦争が終れば父は帰ってくる、私はその日を待っていたと言いたいためのようなのである。そのつもりで読み返すと、誕生記事には次のような一節もある。

夜明けに女の子が生まれた。その子はあらゆる点でお父さんに似ているとみんなが言っていた。私とその赤ちゃんである。(6 巻 8 章 1 節)

¹⁵ アレクシオス 1 世が家族とフィリップポリスを訪れたことは、ゾナラス『歴史要略』も記している。異例のことだったからであろう。Zonaras, *Epitome historiarum*, vol. III, ed. Th. Büttner-Wobst, Bonn, 1897, p.753.

¹⁶ 『アレクシアス』は、6 巻 6 章でノルマン公ロベール・ギスカールの死とデュラキオンの解放について述べ、占星術の話に脱線した 7 章を挟んで、8 章冒頭でアンナの誕生を記しているが、ギスカールの死は 1085 年 7 月、アンナの誕生は 1083 年 12 月である。

私は父に似ている、父の不幸を理解できるのは私だけである。父は言っている。自分は内外の敵と戦い続け、皇帝としての責務を立派に果たした。しかし辛い日々であった。穏やかに暮らすことができればそれに越したことはないのだが……。そのような父の思いを伝えるのも私の仕事である、父の治績を記しながらアンナはそう考えたに違いない。夫ブリュエンニオスへの不満や弟ヨハネス 2 世に対する恨みだけではなく、ビザンツ人の伝統的な戦争観、そしてなによりも父アレクシオスへの哀しい思いが、戦争の歴史『アレクシ阿斯』に似つかわしくない発言の背後にあったと結論したい。

(大阪市立大学名誉教授)